

(寄稿)

認知症における音楽療法とその効果

若い頃によく耳にした音楽を聴けば、その頃のことを鮮明に思い出す経験は、誰しもあるかと思えます。また、子供の頃運動会などで行進曲に合わせて歩くという経験は、日本人の殆どの方にあると思えます。今でも行進曲を聞くと、ついつい足取りをそのテンポに合わせてしまうものです。言葉でテンポに合わせよう促されている訳ではありませんが、音楽というのは、不思議な力を持っています。実はこのメカニズムは、音楽が身体運動を実現する脳の部位に直接的に作用することによるといえます。

この音楽の力は認知症の治療に用いられています。詳細は本稿をご参照いただきたいのですが、音楽療法の開始前後で、全ての評価指標が、優位な改善を示した訳ではありませんが、認知症の行動・心理症状(BPSD)や日常生活動作(ADL)では優位な変化が見られています。そして、患者の家族や介護施設関係者からは、「表情が明るくなりよく笑うようになった」「自信をもって話すようになった」などの声も聞かれています。

この論文で用いられた音楽療法は、単にみんなで合唱するのではなく、「フラッシュソングセラピー」と呼ばれる治療法を用いて、京都医療センターにおいて実施されているものです。

本稿では、認知症における音楽療法について、一般社団法人臨床音楽協会代表理事、東京女子医科大学名誉教授 岩田誠医師、独立行政法人国立病院機構 京都医療センター、宇多野病院 音楽療法士、一般社団法人臨床音楽協会 理事 飯塚三枝子音楽療法士、株式会社フェイス グループ戦略推進本部 音楽医療事業 リーダー 中務佐知子氏に寄稿いただき、認知症と音楽療法に関する解説及び、音楽療法をサポートするツールについて解説いただきました。

岩田誠医師には、音楽の持つ不思議な力や特徴、音楽の起源、そして認知症における音楽の作用について、分かり易く解説いただき、飯塚三枝子音楽療法士には、実際に音楽療法を実践する立場として、どの様な手法で実践しているのかなど実践的な取り組みと実際の効果について論文に発表されているデータを紹介しつつ、解説いただきました。そして、中務佐知子氏には、京都医療センターの音楽療法を通院後や自宅でも継続できるよう、音楽療法のサポートツール(アプリケーション)について、その機能と開発に至った背景などをご紹介いただきました。

音楽というものは、時代の変化と共に移り変わり、それぞれの時代ごとに人の記憶に刻み込まれているもので、誰にとっても身近な存在といえます。その音楽を用いた認知症治療は、いつでも、楽しみながら取り組み、患者にやさしい療法の一つと言えるでしょう。本稿が認知症治療の選択肢の一つとして役に立てば幸いです。

(市川)

2019年6月24日

Healthcare note

(No. 19-06)

寄稿者名：

岩田 誠
一般社団法人臨床音楽協会
代表理事
行 加リニク柿の木坂 院長
東京女子医科大学
名誉教授

飯塚 三枝子
独立行政法人国立病院機構
京都医療センター・宇多野病院
音楽療法士
京都認知症総合センター
音楽療法士
一般社団法人臨床音楽協会
理事

中務 佐知子
株式会社フェイス
グループ戦略推進本部
音楽医療事業 リーダー

編集主幹：

野村ヘルスケア・
サポート&アドバイザー
市川 剛志

野村證券株式会社
金融公共公益法人部